世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

Practice of “Service-Learning” at Junior and Senior Highschools : New Practice of Community Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 洋祐, 上岡, 学 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/744

中学校・高等学校におけるサービスラーニングの実践
―地域教育の新たな実践―

Practice of “Service-Learning” at Junior and Senior Highschools
–New Practice of Community Education–

小　澤　洋　祐*
OZAWA Yosuke
上　岡　　学†
UEOKA Manabu

はじめに

現代社会において環境の多様化が進む中、社会に適応し、個人の力を発揮するために生徒に最も身に付けてほしい力は、自分で進路を切り開き、諸問題に対して逃げることなく向き合い、自ら考えて行動していく力であると考えられる。

筆者は、中高生への指導として、「自ら主体的に考え、行動する力」を身に付けさせるための教育方法を模索している中で、地域と連携した教育を行うことによってその力を身に付けさせることはできないかと考えている。一口に地域教育といっても、その目的や方法は多数存在し、社会教育や生涯教育の分野まで包括して考えていくことになる。

本研究では、それらの広範な中で次の２つを目的とする。１つは、ボランティアを起点としたサービスラーニングという観点から筆者が勤務校で実践してきた教育実践をまとめ、効果と課題を検証し、提示することである。もう１つは、それらを踏まえ、今後の教育活動における地域連携の可能性、学校を窓口とした教育の可能性について明らかにすることである。

１．意義

(1) サービスラーニングの概要

サービスラーニングについて、本研究では、次の特徴を兼ね備えているものをサービスラーニングととらえることとする。

*藤村女子中学・高等学校　†武蔵野大学教育学部

> 第1に、サービス（奉仕）を通じて、現実社会へ何らかのインパクトを与えることである。（中略）用意された疑似的な体験ではなく、真に人々の役に立ったという、リアルな体験こそがサービスラーニングでは重要となる。
>
> しかし、第2に、それは単なる体験ではなく、構造化された教育的取り組みであるということである。（中略）すなわち、ボランティア活動であれば何でも良い、ということではなく、学習目的に沿った活動が取り組まれなければならない。また、このために、サービスラーニングではどのように人々によい影響を与えたか、そして学生自身が何を学んだか、という「振り返り」（reflection）を活動中や活動後に行うことが重視される。(1)

したがって、本研究においては、次の２つをサービスラーニングとして定義する。

> 定義A「現実社会へインパクトを与えること」
> 定義B「学習目的が存在し、振り返りを重視すること」

これら２つの要件を生徒たちの活動が満たしているのか、それ以外に具体的に何らかの学習効果があったのかを検証していきたい。

(2) 世代間交流と生涯学習の観点における有用性

学校の教育と地域を結びつける（関わらせる）という観点においては、世代間交流と生涯学習という視点が重要である。サービスラーニングとしてボランティア活動を行っていくにあたり、高齢者福祉、児童福祉というものに関わる可能性が高い。

これらを包括して考えるための概念としてソーシャル・キャピタル（社会関係資本）が重要である。学校は地域とは切っても切り離せない場所であるが、公立、私立の違いによってはその地域において必ずしも学校の役割が有益と考えられているわけではなく、むしろ互いに溝を感じている場合も少なくない。しかし生徒たちが地域に出て学びの場を広げていくためには、その構図を変え、学校と地域におけるソーシャル・キャピタルの向上を念頭に置かなければならないと考えている。双方に互換性・補完性のある学習者、支援者の関係に信頼性を芽生えさせ、「互恵性」のある学習を目指すことに効果があるという論文もあるように、(2) 社会関係資本の発展も一方で目指すべき課題である。

２．私立藤村女子中学・高等学校における実践内容

(1) 学校について

藤村女子中学・高等学校は東京都武蔵野市にある女子校である。吉祥寺駅から徒歩圏内（約400ｍ）にあり、町の中にある学校として周辺住民からも認知されている。

地域の行事へと生徒会が参加する機会を作ったり、部活動で駅周辺行事に協力をしたりするこ

ともあり、これまでも地元との交流は行っていた学校ではあるが、協力関係にあるという状況から大きく変化することはなかった。生徒達は楽しそうではあるものの、言われたことをそのまま行っているという部分から抜け出すことはできていなかった。

そこで地域を教育の場に変えることはできないかと考えたときにサービスラーニングによるカリキュラム開発とその実践を考えたのである。手始めに取り組んだのは地域のボランティアセンターと連携したボランティア活動の提示だった。

(2) ボランティア活動から地域教育の考えに至るまで

筆者自身がボランティア活動をする部活動の顧問をしていた関係もあり、ボランティアという間口を広げるためにボランティアセンター武蔵野を訪ねた。そこでボランティアセンターの運営委員の依頼を受け、正式に運営委員として携わることになった。 運営委員として地域のボランティアの現状を知っていくうちに、そこに携わる人々は新しい意見、特に若い人たちの意見を強く求めていることを知った。これには現状の閉そく感を打破したいという考えを持っている人や、視点を変えた意見が欲しいという人もいたが、そもそも地域の活動にかかわる一員として、全員が発展的に何かを変えていきたいという思いを持っているということがわかった。これは前述の定義Aが目指すところである。

そこでボランティアという形で生徒たちが地域に出ていき、自らの考えを生かす場を作ると同時に、勉強できる環境を作ることはできないかと考えた。そこでサービスラーニングの概念を核としてカリキュラムを作成し、地域教育として実践に結びつけた。

以下はその実践記録（時系列）である。

① 防災ボランティアマップ作成（2013年～ 2015年）

その一環としてスタートしたのが、防災ボランティアマップの作成である。この実践を始めるにあたり、筆者が運営委員として参加している『ボランティアセンター武蔵野』と連携し、ボランティア紹介等の相談をすることにした。運営委員には地域の方々も参加しており、様々な意見をもらうことができた。

ここで最初に行った活動は「災害ボランティアマップの作成」である。（資料１）

このマップは武蔵野市に災害が起こった際、全国各地から来るボランティアの受け入れ体制を整える訓練で使用するものである。

活動を開始した2013年以前は、ボランティアの人に渡す地図がわかりにくいことが問題となっており、見やすくわかりやすい地図を求めている状況だった。そこでこの地図作成を本校の生徒と連携して行うことを提案し、防災ボランティア訓練の会議から、生徒も含めた話し合いをして作成することにした。生徒達は街の目印となる部分を写真に撮り、完成した地図を元に実際の防災訓練で使用した。

この活動で重視したことは、２つある。

１つは事前に自分達が行う活動にどれだけの意義があるのかを地域の方に説明してもらうこと。これによってこれから自分達が行うことへ向き合う姿勢が変化した。これはサービスラーニングの定義Aにあたる部分である。

２つめは活動後の振り返りである。これはサービスラーニングの定義Ｂにあたる部分である。自分達が作成に携わった物が当日どのように使用されているのかを見ることで、自分達の成果を実感することができると考えた。ボランティア活動を教育に取り入れようとする際、本時の実施のみで終わることが多い。そこには「振り返り」「評価」が存在しないか、弱いのである。自分達が振り返ること、そして他者からの評価を得ることがサービスラーニングの発想からは重要である。したがって、可能な限り成果を直接見せる機会は作るべきである。

②　学校外ボランティア活動（2013年～ 2015年）

これは高校３年生で、推薦入試などを用いて進路先が決定した生徒達を対象に、平日ボランティア活動を行わせることを目的とした活動である。導入目的は二つある。一つは自分の力を誰かのために役立てて、何かをなしたという経験をさせるということだ。これは現実社会への影響という意味で定義Ａにあたる部分である。二つ目は身近な地域でどのような活動をしている人がいるのかを知ると同時に、自分の進路に向けて有益な勉強の機会を地域の人たちから得ること。これはサービスラーニングの定義Ｂにあたる部分である。

この実践の初年度は、高校３年生複数名を福祉施設や地域の活動へ参加させる組と、学校内外の清掃活動を行わせる組に分かれて行った。自主性を持たせるという意味も込めて、以下の内容を生徒に提示し、自分たちで選んで活動をするという形式を取った。

・ボランティアセンターを通して武蔵野市の地域社協で行っている「親子ニコニコ広場」への一日参加。
・放課後見守り活動『ぶじかえる』への参加。（現在は小学校併設の学童クラブの時間延長により、発展的解消をしている）
・杉並区の児童館にて、子供たちとのドッチボール練習や交流。
・学校内外清掃活動。

それぞれの活動先に行き、実際に地域が抱えている問題点を知る機会を作り、体験後は振り返りとしてパワーポイントを作成し、体験者相互での発表を行った。発表に際しては、活動でお世話になった方も校内に呼んで生徒の発表を見てもらうことにした。これは学習目的を振り返るという機会を作ると同時に、地域の方々と共に振り返ることで自らの力を使ったという実感も持たせることができた。定義A,Bともに当てはまる内容であった。

生徒達からは身近な地域でどんな活動が行われているかを知る機会になったと同時に、将来の進路として保育に関係する生徒たちは事前の勉強となったという話があった。また、学外清掃を行ったグループも、見知らぬ人から「お疲れ様、ありがとう」と声をかけられたことを喜んでいた。

③　生徒会活動を通した地域交流活動（2014年～現在）

これまで行っていた活動を学校全体に広げていくために、続いては生徒会活動を通して地域との交流を考えた。すでに秋祭りでの交流などはあったものの、実際生徒たちが地域の人と一緒に行動することなどはなかったため、いくつか実践をさせることにした。

行った内容は以下に挙げ、後の表で活動に関する反省を行う。

・防災ボランティアマップ作製協力
→実際に危険な道をボランティアセンターの運営委員の方々と一緒に歩き、会議室で気づいた点を話し合った。前述したものを生徒会の仕事として位置付けたものである。
・学校行事の中で、ネパール震災義援金の募金集め。
→これは生徒達から主体的に出てきたものである。地域と限らず、困っている人への協力をしようという考えが生まれたものであった。
・あしなが育英会街頭募金活動への協力
→地域の大学生主体の活動であるため、大学生に一度学校に来てもらい、その活動の趣旨や必要性、想いを理解してから活動に臨ませた。こちらは振り返りまではできなかったものの、目的意識を明確にするということはできた。
・九州北部豪雨災害義援金募金活動
→こちらは武蔵野市民社会福祉協議会が主催した活動であり、一緒に活動をした。

④　部活動を通した地域交流活動（2015～現在）

・各部活動ごとの年間予定を確認し、ボランティア活動として外に出ていくという活動を行った。

例１：吉祥寺駅前朝一番清掃活動
　　毎週日曜日の朝8時から駅前清掃を行う。練習前の部活動が参加。
例２：東部フェスティバル（防災まつり）の準備手伝い
　　会場設営など、準備段階の手伝い

各活動に共通していたのは、行事の担い手になる人物の高齢化である。特に地域社協という形をとっている場合は地縁が元となって長く続けている人が多くいる反面、若い世代との交流が少なくなってしまっているという問題点があった。そのため、中学・高校生という若い世代との交流という面で喜んでもらっている部分があると同時に、物理的な準備を手伝ってもらったことで本当に助かっているという声があった。

この実践に関しては、様々なクラブごとに地域に出るという特性上、定義Aにあたる現実社会へのインパクトはあるものの、個々に振り返りを行うことは難しかった。

⑤　中学生対象の、戦争を知る授業（2015年）

武蔵野市内で地域ごとに福祉の会が存在しているのだが、今回はその中でも学校に近い地域社協（吉西福祉の会）に協力してもらい、戦争体験を語ってもらう授業を国語の授業内に位置付けて行った。シベリア抑留体験をした90歳の方や、疎開の体験などを語ってもらい、その後聞き取り原稿をグループごとに作成した。話者もグループ内に参加してもらったため、不明点やわからない部分を確認しながら原稿を完成させた。この聞き取り原稿は、当該学年が上級生になった

際、下級生へと語り継ぐことができないかと考えていたものである。学習目的は存在していたために定義Bとしてあてはまるものと考えることはできるが、実際次年度にその原稿を読んで聞かせるという実践が授業の関係上できずに終わってしまったことが最大の反省点である。

聞き取り原稿の発表をする際に、話していただいた方々にも見ていただきたいと考え声をかけたが、残念ながら来ていただくことはできなかった。事前に目的などを伝えてはいたが、正式に発表し、形を作り上げるところまで確認してもらうことも一つの方法であると考えている。

⑥　中学生の乳幼児交流体験（2016年～現在）

乳幼児交流を通して命の大切さを学ぶと同時に、自己肯定感を高めることを目的とした授業。総合的な学習の時間と家庭科の時間、国語の時間などを使い教科横断的に中学生へ授業を行った。

地域で行われている親子ひろばを学校内で行うことができないかと考え、主催しているお母さんサークルや市役所に打診したものの、その行事を学校という場で行うことは不可能だということになった。そのため、学校独自の行事としてママサークルの方々や親子ひろばへ参加している人たちへ集まってもらえるようチラシを通して依頼した。

二年目となった現在は、武蔵野市の後援をもらいながら地域の子育て世代が集まる場へチラシを配布し、協力していただける方々を広く募集した。

中学生に対しては、2回の交流の機会を持たせることで、乳幼児の成長を感じさせると同時に、その子たちのためにどのようなことができるのかを考え、おもちゃ作りをした。その後、中学3年生は今までやってきたことをもとにパワーポイントを作成し、お母さん達と同学年の生徒に向けて班ごとに発表させた。

生徒たちの感想、振り返りや結果などは（資料２）参照。

定義Aの現実社会へのインパクトという意味では、生徒の実感になる部分は少ないかもしれないが、地域のお母さん達からの反響は大きくあった。そのため、学校の教育方法として少ない地域の方々にではあるが、印象や見方を変えることができた。

また､結果を見て､生徒たちにとっては総じて命の大切さや自己肯定感を実感させる機会になっていた。これは定義Bの目的を達成し、振り返りとして発表をした結果、参加者の方々からの声を伝えることもできた。参加してくれた人たちからの声を評価としてみることも一案であると考えられる。ちなみに2年目になって良かった効果としては、協力してくれるお母さんたちからもいろいろな意見が生まれ、反映させて一緒に授業を作るということもできていたことがあげられる。これは世代間交流の萌芽を感じさせる一幕であった。

⑦　高校1年生地域インタビュー（2017年）

地域の方々の協力を得ることができる土壌ができていたことを実感していたため、新たな取り組みとして地域において様々な仕事をしている人たちにインタビューをし、なぜその仕事に就いたのか、どうしてその仕事を選んだのかなど、その人の人生を聞いて自らの進路選択の参考にする時間を作った。これは総合学習の時間において、学年の取り組みとして考えたものである。

多くの協力を得て、1班5人程度で22か所の職場で話を聞き、それをグループごとに振り返ってまとめ、発表するところまでを一つの流れとした。

学校内という限られた空間とは対照的に、生徒たちにとって身近で活躍している人、頑張っている人の存在を実感することに意義があり、自分の進路選択の一助としている生徒も多くいた。

この実践においては、定義Aよりも定義Bを優先する考え方であったが、パワーポイントの発表やワークシートは振り返りとして非常に有益であり、生徒達も真剣に発表に耳を傾けていた。

3．評価方法

(1) サービスラーニングであるかの検証

これまでは実践の内容をまとめ、簡単に振り返りをしていたが、これらの実践がサービスラーニングという一つの枠組みとして成立しているか、評価してみたい。以下の二つの枠は、実際の活動内容と、定義A,Bに該当するかを確認し、考察したものである。

定義A 「現実社会へインパクトを与えること」
定義B 「学習目的が存在し、振り返りを重視すること」

	実際の活動内容				
	防災ボランティア マップ作製	学校外 ボランティア活動	生徒会 ネパール震災 義援金	生徒会 あしなが育英会 街頭募金	生徒会 地域落書き消し 協力
定義A	○	○	○	○	○
考察	実際の防災訓練で使用され、感謝された。	身近な交流を通して、役に立った実感をした生徒多数。	実際に社会福祉協議会へ手渡しし、赤十字へ送ってもらった。	募金活動への協力と、どの程度集まったのかを知ることができた。	市役所と協力し、地域へのアピールという意味合いでの貢献を果たすことができた。
定義B	○	○	×	×	×
考察	作成時点でボランティアセンターの運営委員と反省会を行い、現状の問題点を学ぶことができた。	発表資料作成を通して振り返りを行う。	学びなどへの発展は少なかった。	事前学習として担当学生から想いを聞くことはできたが、振り返りはなかった。	振り返りとして学ぶという時間を取ることはできなかった。

	実際の活動内容				
	部活動を通した地域交流活動	中学生戦争体験聞き取り授業	中学乳幼児交流体験	高校１年生地域インタビュー	
定義A	○	×	○	×	
考察	地域に出て活動するというきっかけにはなり、感謝の言葉をいただいた。	実際に役立ったというよりは、お年寄りからこういう機会をいただけてありがとうという話はあった。	生徒たちの実感としては少ないが、お母さん達からは喜びの声が多かった。	役に立てたというよりは、こちらの学びが優先した内容だった。	
定義B	×	○	○	○	
考察	きっかけで終わってしまい、振り返ることまではできなかった。	聞き取り原稿作成は一定の振り返り効果はあった。	実際にやったことを振り返りとして発表をする機会を持てた。	振り返りの時間を取り、それぞれの発表を共有して学びとすることができた。	

実際に学校内で行った実践内容を、サービスラーニングという内容に照らし合わせた結果、サービスラーニングとして成立したと言える内容は限られてくる。その精査を行うためには、事前に教育プログラムとして学校内と地域の中で双方の周知、確立がどれほどできているかということが大きくかかわる。その意味では、教育プログラムを敷いたうえでサービスラーニングを行わなければ、その意義や効果が薄れてしまう可能性が高いということも確かな結論である。

(2) 評価の観点。

教育プログラムとして成立させることを考えれば、生徒たちの実践に対する評価方法を考える必要がある。今回はその評価に至る過程として、どのような方法があるのかという提案をしてみたい。

①　生徒による自己評価

自己評価の方法として、実際にどのようなことを行ったかを書いておきたい。

・活動のまとめと発表

活動を振り返るために、内容はパワーポイントでまとめ、生徒同士で発表させる機会をいくつかの実践では作った。自分の意見をまとめ、他者へ発表する機会は生徒にとって振り返りを行ういい機会であり、生徒達も友人が発表するということで真剣に話を聞く姿勢を見ることができた。この方法は振り返りとして定義Bの内容を押さえることができると考えている。

②　関係した地域の方々からの評価

乳幼児交流体験では、中学生に対して話をしてくれたお母さん達の意見をアンケート形式にして評価をするという方法を取った。こちらは継続している活動でもあるため、年間通して自分た

ちと触れ合った生徒たちにどんな成長が見られたのかを書いてもらうようにした。（資料2）
こちらは定義Aにおける現実社会への影響を直接感じられる機会でもあると考えられる。

これらの評価は直接意見をもらうことができるというだけではなく、それを生徒達に還元させることで一つの学びの形としてとらえることはできている。しかし、仮にこれを数値的評価として算出しようとすると、途端に困難さが増してきてしまう。

そのため、評価に対する考え方を二つここでは提示しておきたい。一つは、生徒たちに還元された内容（自己評価と地域の方からの評価）をそのままコメントとして評価材料とし、数値的評価を行わないという方法である。こちらは生徒たちにとって自己評価と他者評価を並べてみることができるため、自分なりにやったことへの評価を感じ取ることが可能になる。

二つ目は、職業インタビューの時間において行った評価方法を一つの形として考えたい。内容としては、直接インタビューを行ったときに記載したインタビューシートを元に、生徒たちが完成させたパワーポイントと比較する。その内容から、インタビューの趣旨に合致している質問内容とその答えを、適切にパワーポイントに反映させているかを確認し、3段階で評価する。事前に生徒達と協力してくれる方々へ説明した目的に対し、適切にその内容をまとめて発表できていれば最高評価A。不足している部分があればB。意図と全く違う内容で発表している場合はCという評価を行う。これは試験的に行ったため生徒たちに提示はしていない。

この方法はこちらの意図した質問内容に対し、適切に聞き取りを行うことができたかという観点を評価するものとなるものの、生徒自身で考えた発表形式を否定することにもなりかねない。ただし、学校と協力者の連携と、その目的を事前に明示し、生徒の発表が一定基準に満ちた内容であると数値の評価を行うことは可能であると考えられる。

問題点は、その評価方法に具体性をかなり入れなければ評価者（教員）の主観になりかねないこと、意図が相手に伝わっていなければこの評価方法が成立できない可能性があることである。

しかしこれらはプログラムを確立し、協力者と協定を結ぶという事前準備が十分に行えればクリアできる可能性が高い。効果的なサービスラーニングの取り組みをマネジメントするための構成要素として「地域のニーズの把握→学習効果の設定→動機づけ→事前の準備と研修→意義ある活動の実践→効果的な振り返り→評価→賞賛と認知」というものがあるともされている。(1)

この条件を学校側が満たし、生徒たちに活動させていくことができれば十分有意義な活動としてみることができると考えられるが、具体的な評価方法に関してはまだまだ検証が必要である。

4．結果と提案

サービスラーニングを通して学べることの一つとして、地域における問題点を発見すること、解決するために努力する人の存在を知ることがある。この知るという経験が、実行するという第二段階へ進むための重要なプロセスであると考えられる。今回は学校で行っていた地域活動、ボランティア活動をまとめ、それをサービスラーニングという枠組みに当てはめてみた。結果的に必要なものはいくつかわかってきたため、その方法についての提案をしたい。

・提案事項①

各団体との協定、学びの目標を設定し受講者評価と担当者評価を行う。

これはサービスラーニングを行う上で必要な、地域と教員という大人同士の事前協定である。ともに着地点を定め、それに伴ったものを生徒が考え出すことができたのかを相互評価の上で行っていくべきではないだろうか。また、その際に教員としての評価方法は事前に述べたものを使っていくことで対応できると考える。

・提案事項②

各所の問題点（地域における高齢者や乳幼児、その他環境の問題など）をそれぞれが持ち寄り、検証したうえで、自分たちの力がどのように有益に使うことができるのかを考えさせる機会を作る。

これは方法論の一つであるが、生徒たちがそれぞれ地域の中で専念する問題点を見出し、その問題点を持ち寄って多くの視点から解決する方法を探るというものだ。文化祭などの機会を通してシンポジウムを行うという実例もあるため、その方式を学校内で取り入れて実行していくことも可能ではないかと考えている。(3)

・提案事項③

学校という組織の中でこの取り組みを現実化するために、どのような手順で行っていくべきなのかを具体的に整理し、体系化した取り組みのモデルを作る。

これまでの取り組みの際に必要だと感じたのは、学年・教科を横断した取り組みの形を作ることだ。特に学びの振り返りを行う際には、主目的をどこに置くかで関わる場所が教科単位の動きになるのか、学年単位の動きになるのかも変わってくると考えられる。

理論として必要であると考えられる地域教育やサービスラーニングを、現実の場に反映させるための具体的方策を多く提案していくことが必要であると考えている。

教育活動を地域と連携するという試みは、地域を通して社会の問題点を研究するということにもなりうる。今後の教育現場における、生徒たちに何かしらの研究を行わせ、その成果を進路実現のために使用するという現在の流れは、このような地域教育を経た先に効果的に生まれてくるものであると考えている。次世代に求められる教育と、地域の連携は社会にとってもより良い効果を生み出すのではないだろうか。

また、生徒たちが自ら主体的に考え、行動する舞台は学校内だけではなく、むしろ外に出ることによって生じてくるものであると考えられる。

生徒の成長を助けるための方法を、学校だけではなくその地域との連携を取りながら、良好な関係を築き上げることが重要である。そのために学校に求められているものは、目の前の生徒と、身近な環境にいても知らない様々な人たちとの窓口となり、ともに有益な学びの場を創出することである。それが子供を育てるということであり、地域を育てるということであり、社会を育てるということにつながっていくと確信している。

引用文献

1．桜井政成・津止正敏編著（2009）「ボランティア教育の新地平　サービスラーニングの原理と実践」ミネルヴァ書房　p.10-11　p.167

2．草野篤子、柿沼幸雄、金田利子、藤原佳典、間野百子　編著(2010)『世代間交流学の創造　無縁社会から多世代間交流型社会実現のために』p.51

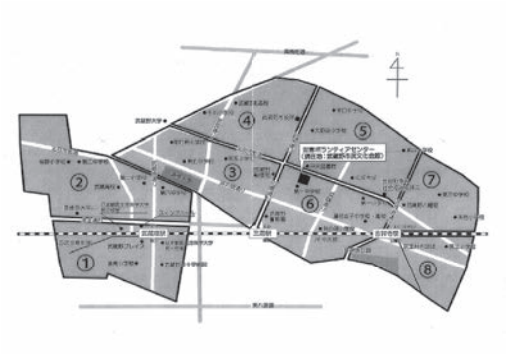
3．宮下与兵衛/栗又衛/波岡知朗(2014)『地域を変える高校生たち――市民とのフォーラムからボランティア、まちづくりへ』　p.16

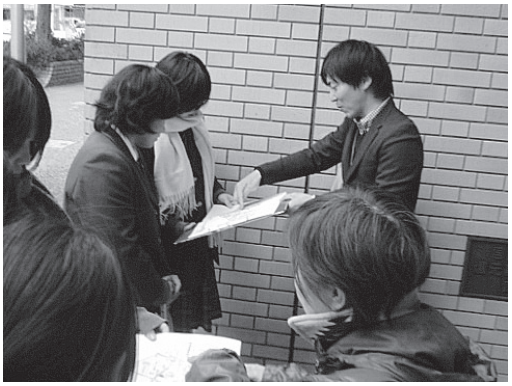
参考文献

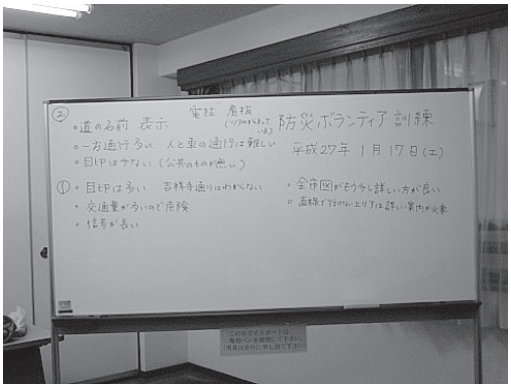
1．遠藤克弥　編著(2011)『地域教育論　生涯学習から社会教育へ』

（資料１）防災ボランティア訓練

生徒達は地図を元に地域の人たちと写真を撮りながら歩き、その後話し合いをした。



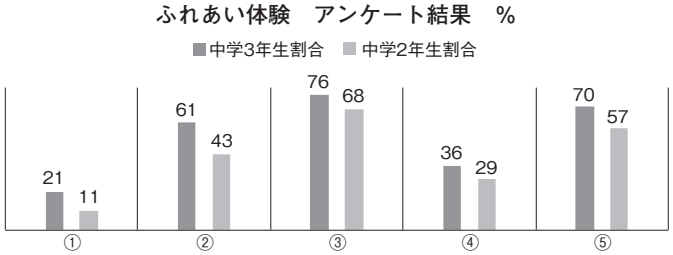


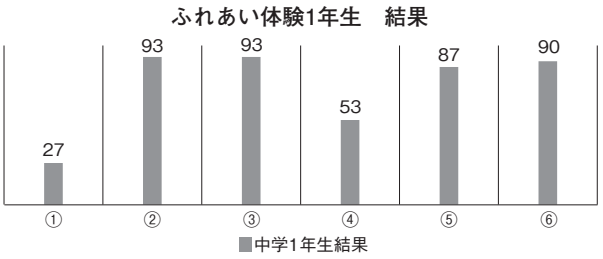




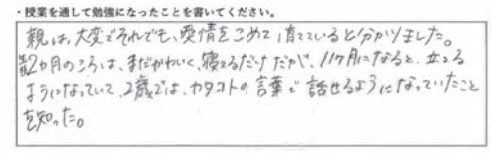
（資料2）乳幼児交流体験資料

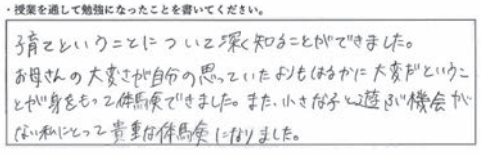
評価項目
① 今回の授業を通して、自分が赤ちゃんの頃の話を親とした。
② お母さんたちの話を聞いて、自分も同じように大切にされていたのだと感じることができた。
③ 子育てをするお母さんの大変さや楽しさを実感することができた。
④ 自分が将来お母さんになった時を想像することができた。
⑤ 命の大切さを実感することができた。
⑥ 今回の授業をやってよかったと思う。

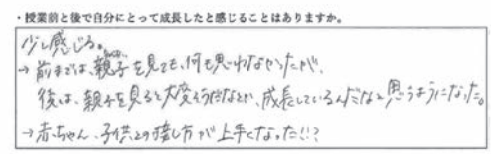


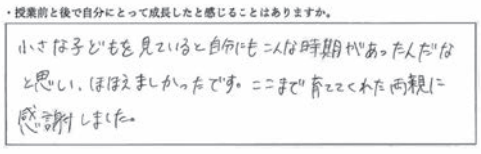


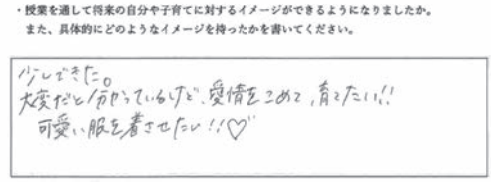
○生徒アンケート結果抜粋

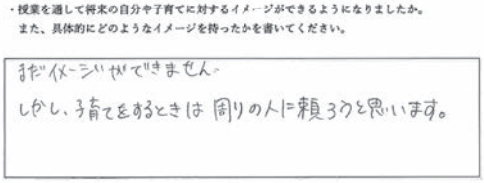

・授業を通して勉強になったことを書いてください。
親は、大変でそれでも、愛情をこめて育てていると分かりました。
記0月のころは、まだかわいく、寝てるだけだが、1/0月になると、立つようになっていて、3歳では、カタコトの言葉で話せるようになっていたことを知った。


・授業を通して勉強になったことを書いてください。
子育てということについて深く知ることができました。
お母さんの大変さが自分の思っていたよりもはるかに大変だということが身をもって体感できました。また、小さな子と遊ぶ機会がない私にとって貴重な体験になりました。


・授業前と後で自分にとって成長したと感じることはありますか。
少し感じる。
→前までは、親子を見ても、何も思わなかったが、
後は、親子を見ると大変そうだなと、成長しているんだなと思うようになった。
→赤ちゃん、子供との接し方が上手くなった!?


・授業前と後で自分にとって成長したと感じることはありますか。
小さな子どもを見ていると自分にもこんな時期があったんだなと思い、ほほえましかったです。ここまで育ててくれた両親に感謝しました。


・授業を通して将来の自分や子育てに対するイメージができるようになりましたか。
また、具体的にどのようなイメージを持ったかを書いてください。
少しできた。
大変だと分かっているけど、愛情をこめて、育てたい!!
可愛い服を着させたい!!♡


・授業を通して将来の自分や子育てに対するイメージができるようになりましたか。
また、具体的にどのようなイメージを持ったかを書いてください。
まだイメージができません。
しかし、子育てをするときは周りの人に頼ろうと思います。

○お母さんアンケート抜粋

日程	
9/11（中二）	学生さんが非常に反応よくお話を聞いてくれてよかった。 ~~学生さんの~~学生さんが元気におどってくれたり踊んでくれたりよく対応してくれてよかった。
9/27（中三）	中学三年生は、前回欠席してしまいましたが去年の授業で遊んだことを皆よく覚えてくれていて、 また、子供に対する接し方もずいぶん柔らかに、自然になったように感じました。 この学年は、去年もとても雰囲気がよかったですが それが今年も崩れず、それ〃が子供達にも伝わっているのだと思います。発表の中の言葉に心を動かされるものがいくつかありました。

ご協力ありがとうございました。

h29中3②ふれあい体験　アンケート

藤村女子中学校

~終了後にご記入し、担当までご提出ください~

●藤村女子中学校では、昨年度より乳幼児ふれあい体験を開始しました。1年間で中1は1回、中2・中3は2回ずつのふれあい体験授業を行いました。

今回接していただいた3年生は今日で4回目の体験となり、最終回を迎えました。そこで、複数回参加いただいた方を対象にアンケートにお答えいただきたくお願い申し上げます。

Q1、回を重ねたことにより、生徒に変化や成長を感じられた点はありましたか？

はい　　いいえ　　わからない

Q2、はい と答えられた方に質問です。その理由を教えてください。

~~後略~~受け答えがしっかりするようになったし、子供に対する接し方がとても柔らかになって、和やかでした!!

ご協力ありがとうございました。やはり何回も会うことは意味があったのではと感じました。